コロナ禍の記憶と記録を収集する「コロナアーカイブ@関西大学」の諸実践

菊　池　信　彦

1．はじめに

本稿では、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（以下、KU-ORCAS）の研究者を中心とした関西大学内の共同プロジェクトとして実施している「コロナアーカイブ@関西大学」[1]について論じる。

図１　コロナアーカイブ@関西大学トップ画面

コロナアーカイブ@関西大学とは、ユーザ参加型のコミュニティアーカイブの手法を用いて、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の流行という歴史的転換期における関西大学の関係者の記録と記憶を収集するデジタルパブリックヒストリーの実践プロジェクトである。

本稿では、コロナアーカイブ@関西大学の意義を踏まえ、そのシステムや収集資料、実践内容について紹介していく。なお、本稿は、デジタルアーカイブ学会誌2021年１月号掲載予定の「デジタルパブリックヒストリーの実践としての『コロナアーカイブ@関西大学』に、加筆修正を加えたものである。

2．世界の「コロナアーカイブ」と本研究実践の意義

2020年のパンデミック以降、コロナ関係資料のアーカイブプロジェクトは世界中で行われている。その一方で、国内での実施例は浦幌町立博物館や吹田市立博物館などの博物館を中心に数機関にとどまっている。とりわけ、ユーザ参加によるデジタルアーカイブの構築は、管見の限り、コロナアーカイブ@関西大学以外では実施されていない。したがって、コロナアーカイブ@関西大学は、将来起こりうる危機的状況下における同種のプロジェクトの実践に際しては、参照事例になりうるものと言えよう。

3．コロナアーカイブ@関西大学の概要とその特徴

コロナアーカイブ@関西大学を構築するにあたって特に検討を行ったのは、次節以下の４項目である。これらを取り上げることで、概要と特徴を明らかにしたい。

3.1　ユーザ参加型の採用と投稿資格

コロナ関係資料の収集方法を考えた2020年４月初めは、第１回目の緊急事態宣言下であり、外出して資料を集めるということが困難であった。また、デジタルパブリックヒストリーとしてユーザの自発的な参加を意図したことからも、ユーザ参加型のコミュニティアーカイブという手法を選択した。しかし、投稿数の予測が困難であったことから、コロナアーカイブ@関西大学の投稿資格は、関西大学の関係者（留学生を含む学生、教職員、校友会会員、併設校関係者とその家族）のみとし、スタートした。

3.2　システム構築と収集対象資料

コロナアーカイブ@関西大学の開発は、簡易かつ早急に構築できることをシステムの要件と

した。この要件に合致するものとしてOmeka Classicを選択し、これにより約1週間という短い開発期間で公開することができた。その後、2020年7月にはOmeka Classicから同シリーズのOmeka Sへとシステムリニューアルを行っている。開発当初から、テキストだけでなく画像・音声・動画等の各種ファイルも、地理情報つきで投稿できるようにしており、リニューアル後にはIIIFへの対応を済ませ、ユーザが資料へタグ付けを行うことが出来るソーシャルタギングの機能も備えるようにした。

3.3　権利処理のための取組み

著作権処理のために、一律、クリエイティブコモンズライセンスCC BY-NC 4.0を付与している。これについては、投稿に際して同条件での公開に同意することを利用規約上で求めている。

また、肖像権やプライバシー権への配慮から、投稿者に対しては、人物が写っている場合にはその人物から投稿許可を得たものかどうかの確認を利用規約で求めており、投稿された写真はその許諾を得たものとして扱っている。その他、ユーザ自身も投稿データを非公開で投稿する意思表示ができるようにしている。

3.4　長期保存体制の確保

KU-ORCASは2021年度で終了するプロジェクトであるため、収集した資料データの長期保存は、関西大学博物館および年史編纂室が担うことで合意している。

4．コロナアーカイブ@関西大学の資料の現状

コロナアーカイブ@関西大学は、2020年4月17日に公開し、ユーザの投稿受付を開始した。対面での広報活動が憚られるなか、広報はKU-ORCASのウェブサイトおよびSNS、学内サイトで行った。しかし、2021年1月8日現在の資料点数は143点（非公開含む）で、投稿されている資料は、ほぼすべてが画像資料である。

資料につけられたタグ全体を見ると収集資料の特徴が見えてくる。タグは「コロナ対策に関するもの」、「行事に関するもの」が多く、その他に「学内・キャンパス周辺の様子」や「家族の様子」におおよそ大別することができる。これらから、コロナアーカイブ@関西大学が「大学コミュニティ」の表現するコレクションとなっていると評価できる。

5．収集促進のための取組み

コロナアーカイブ@関西大学の抱える課題は多いが、とりわけ資料点数の少なさが問題であると認識している。

この課題への対応として、筆者らは主に2つの取組みを進めている。1つ目は、Wikipediaのエディッタソンにならって名付けた「アーカイバソン」というイベントの実施である。これは、吹田市立博物館と連携し、全国の図書館や博物館等の関係者を対象にオンラインでコロナ関係資料の投稿を募るものである。

2つ目は、関大関係者のコロナ禍の記憶や思いをテキスト形式で集める「記憶の投稿」である。当初はオーラルヒストリーを予定していたものの、機材や経験、時間の都合もあり、Googleフォームを利用して記憶の投稿を呼び掛ける方法を採用した。なお、投稿のインセンティブを高めるために、関大の学生に調査協力費として謝金を支払うようにしたところ、開始数日で100件以上の多数の投稿が寄せられる結果となった。

6．おわりに

本稿では、コロナ禍における関西大学の関係者の記憶と記録を、ユーザの主体的な関与を促し収集するコロナアーカイブ@関西大学の実践について紹介してきた。2021年1月初旬の現在、COVID-19の感染者数は激増し、2回目となる緊急事態宣言が発出されるに至った。コロナ禍の終息が見通せない中、筆者らの取組みの出口も、まだ遠い先となりそうである。

謝辞

本研究は、関西大学による2020年度「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の克服に関する研究課題（教育研究緊急支援経費）」に採択された「『コロナアーカイブ@関西大学』を核とした新型コロナウイルス感染症およびスペイン風邪の記録と記憶の収集発信プロジェクト」の研究成果の一部である。

参考文献

[1] コロナアーカイブ@関西大学. https://www.annex.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/s/covid19archive/page/covidmemory, (accessed 2021-01-08.)

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター 特任准教授